

IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト  
(VOL.02010)

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
ー日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追うー  
「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

(思想・文学分野)

三浦梅園に学ぶ  
～日本と世界を救う自然哲学～

公益財団法人国際高等研究所  
IIAS 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

本テキストは、2016年9月16日開催の第39回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲ-テの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所 I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会が編集・制作したものである。本テキストの無断転載・複写を禁じます。

※本テキストは、2017年夏季「IIAS 塾ジュニアセミナー」のメインテキストとして使用されたものである。

日本の未来を拓くよすが（拠）を求めて  
－日本の近代化を導いた人々の思想と行動、その光と影を追う－

「西の文化」の彼方に「東の文化」を構想した人物

## 「天地の人・三浦梅園」

三浦梅園（みうら・ばいえん：1723-1789）は、10歳以前から天地（自然）の現象に目をみはり、その仕組みに関心を持ち続けた。23歳の時、長崎旅行や『天経或問』という書を通して地の球体を知るが、西洋も天地の仕組みは未解明と感じ探究を続け、30歳の時「氣に観るあり、天地に条理あるを知る」と達観して、「<sup>いちそくいちいち</sup>一即一、<sup>いちいちそくいち</sup>一則一（一有二、二開一）」という条理と反観合一法という認識法で天地の仕組みの叙述を始め、23回書き直し、23年掛けて『玄語』（漢文）という書に完成させた。『玄語』の天冊は天神、本神などの条理語で構成され、難解を以て知られる。6年後の梅園生誕300年に向けて、その難解な所を解明しようと梅園学会（42年目を迎える）は昨年からそれに集中しているが、本講演では梅園の天人の分と天人の合の視点と彼の人間観を紹介する。人間は自然（天）の一部であるが、人間には意識があって、無意の自然（天）とは違い（分）がある。この分は人間の能動性という肯定面を持つが、人間の主観で全てを見ろという否定面を持つ。「其うたがひあやしむべきは変にあらざして常の事也」という有名な彼の懐疑精神は、人間中心の認識全てに向けられていた。梅園は人間を「人道を以て人と為る」側面と「天道に順（したが）って人と成る」側面の統一と見たが、現代人は後者の側面がほとんど理解できなくなっている。

### 小川 晴久（Haruhisa OGAWA）

小川 晴久（東京大学名誉教授。梅園学会代表委員（会長））  
1941年愛知県岡崎市生れ。東京大学大学院人文科学研究科中国哲学  
専門課程博士課程単位取得退学。東京女子大学、東京大学、二松學  
舎大学にて教鞭をとる。専門は東アジア思想史。主著は『三浦梅園  
の世界』、『朝鮮実学と日本』、『南の発見と自立』、『実心実学の発  
見』（編著）、『北朝鮮の人権問題にどう向き合うか』など。



## 目次

はじめに

- (1) 2023 年は、三浦梅園の生誕 300 年
- (2) 「天地の人・三浦梅園」、その代表作は『玄語』

### I 三浦梅園の人物像

- (1) 三浦梅園の出自等
  - ① 三浦梅園の出自
    - (ア) 三浦半島出身で、鎌倉武士の末裔
    - (イ) 三浦家の家業、医者。
  - ② 三浦梅園の生立ち
    - (ア) 自然に尽きぬ興味を示す梅園（幼名<sup>すすむ</sup>晋）少年
    - (イ) 自然に対し尽きせぬ疑問を抱く、梅園（幼名晋）
- (2) 三浦梅園の信念
  - ① 「宮仕え」（仕官）の要請を断る梅園青年
    - (ア) 梅園が「宮仕え」に恐怖を覚えた理由
    - (イ) 「宮仕え」に恐怖を覚えた梅園の生き方
  - ② 梅園の人間観の基にある生活信条、「自立」
- (3) 三浦梅園の生涯
  - ① 梅園の 67 年の生涯  
それは、山中で、一途に、不思議な自然の現象の解明に捧げた生涯
  - ② 梅園の思索は、厳格な規則正しい生活の中で深められ、膨大な作品として結実
  - ③ 著作から見る梅園の関心の所在

### II 三浦梅園の業績

- (1) 経済論『俣原』を通じて世界に知られる梅園
- (2) 百科全書派時代、東アジアに登場した「知の巨人」たち  
三浦梅園(日本)、洪大容<sup>こうたいよう</sup>(朝鮮)、王夫之<sup>おうふうし</sup>(中国)など
- (3) 梅園研究に向かった経緯。三枝博音<sup>さえがひろと</sup>先生との因縁、梅園研究(研究資料)の現況
- (4) 哲学の根本精神が説かれている「多賀墨郷君にこたふる書」
- (5) 西洋に優るとも劣らない東アジアの哲人、  
三浦梅園（日本）、洪大容（朝鮮）その先見性

### III 三浦梅園の命題

命題1：人造則理先、天造則氣先

<「原子の世界」のヨーロッパ、「気の世界」の東アジア>

命題2：一即<sup>いちそくいち</sup>一、一<sup>いち</sup>則<sup>そく</sup>一

<「一」が「主」で、「陰陽」は「声（名）」のみ>

命題3：誠者天之道也、誠之者人之道也（『中庸』）

<「誠」。間断がないこと。絶えず連続していること>

命題4：人道をもって人と為る。天道に<sup>したが</sup>順って人と成る

<「人間の活動」と「自然の営為」との調和>

命題5：俗習の蔽は学之が<sup>こ</sup>砒<sup>へん</sup>鍼<sup>しん</sup>を為す。学習の蔽は殆ど薬石を<sup>なげう</sup>擲つ

<俗習の弊害は学問が治すが、学習の弊害は治せない>

命題6：蔽は必ず<sup>めい</sup>明に由る。塞は必ず<sup>つう</sup>通に由る

<閉塞は開通から生まれる>

### IV 次代の人間像を探る。『<sup>ゆえんろく</sup>愉婉録』に読む「天人の合」

おわりに

- ① 人間賛歌。だが、「人間（人）」は、「自然（道）」に<sup>し</sup>如かず
- ② 先進国は地球温暖化防止に向けてライフスタイルの変更を
- ③ 日々の生活の中でこそ、梅園の教えを実践することが肝要

補遺

『玄語図』

質疑応答

次代を拓く君たちへ — 小川晴久からのメッセージ —

自然から学ぶことが人間の品性を最も高める

2016年9月16日開催

第39回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：天地の人・三浦梅園

講演者：小川 晴久（東京大学名誉教授 梅園学会代表委員（会長））

はじめに

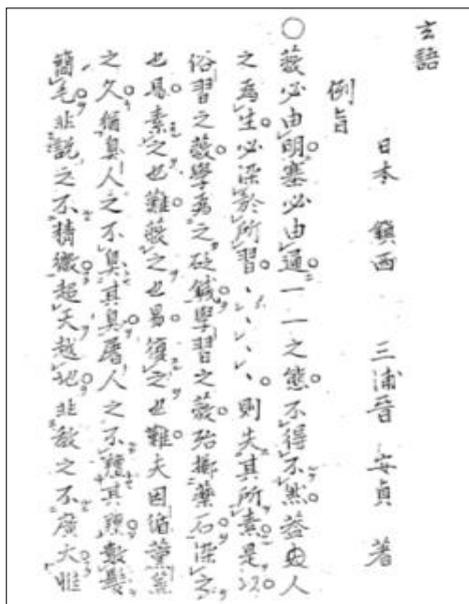
(1) 2023年は、三浦梅園の生誕300年

三浦梅園は、18世紀の人である。亡くなった年はフランス革命が起きた1789年である。生まれた年は1723年であり、その生涯は67年であった。あと6年経つと生誕300年を迎える。



三浦梅園の肖像  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

イ 「天地の人・三浦梅園」、その代表作は『玄語』



『玄語』の冒頭  
『近世儒家資料集成 第1巻 三浦梅園  
資料集 上』（ペリカン社 1989年 11頁）

梅園の代表作に『玄語』がある。全て漢文で書かれている。その『玄語』の中に、この「人は天地の人、道は天地の道、善悪は天地の善悪、是非は天地の是非」という簡潔に記された意味深い規定がある。これをもって、演題を「天地の人・三浦梅園」とした。

ところで、その代表作『玄語』の「玄」は、万物の根源という意味である。老子は、それを「道」と言い、全ては「道」から生まれ「道」に還るものであるとし、世界をそのように捉えていた。この「玄」の字が中国の古典で出てくるのは、老子の『道德経』第一章である。その「玄」の字を冠して『玄語』としたのである。

Ⅰ 三浦梅園の人物像

(1) 三浦梅園の出自等

① 三浦梅園の出自

(ア) 三浦半島出身で、鎌倉武士の末裔

18世紀の東アジアの一角に生を受けた三浦梅園は、大分県国東半島の真中にある二子山、

その麓に生まれてその生涯をその地で全うした方である。長旅に出たのは生涯で3回位である。伊勢までが1度、後は長崎に2度あるだけである。長旅に出たのは23歳（長崎）のときと、28歳（伊勢）、56歳（長崎）のときである。その3回のほかは長旅をすることなく、自然の中で仕事をし、観察をし、生涯を終えられた方である。

三浦という姓を持っており、先祖は神奈川県の上三浦半島と言われている。先祖は鎌倉武士である。源頼朝が亡くなった後内紛が起きて鎌倉武士たちが全国に四散する。その中に九州に渡った人たちがあり、大分、豊後の国に定着した人もいた。その子孫である。三浦の三浦は上三浦半島の三浦であり、梅園の先祖はそこから出た人である。

### (イ) 三浦家の家業、医者。

祖父の代から医者を始めた。したがって梅園も医者である。先祖は庄屋をしていた。しかし、一人息子になってしまったという事情もあり、生涯宮仕えはしなかった。豊後の北に豊前という国があり、そこからは前野良沢や福沢諭吉など、いろいろな人が出た。江戸時代には小さな藩があちこちにあった。特に九州の豊前と豊後は、国東半島を2つに割ったぐらいのところ、2つの国があった。豊後には杵築藩があり、梅園の村はその中に組み込まれていた。

## ② 三浦梅園の生立ち

### (ア) 自然に尽きぬ興味を示す梅園（幼名晋）少年

宮仕えをしなかったことは、梅園にとっては特別な意味を持つ。梅園の息子は宮仕えをせざるを得ず、杵築藩で学校の教授をさせられる。しかし、梅園は宮仕えをしなかった。それは何故か。7、8歳の頃、まだ幼いときから、見るもの、聞くものが不思議で仕方なかった。そのことは、『三浦梅園集』（岩波文庫）所収の有名な手紙「多賀墨郷君にこたふる書」（岩波文庫所収）にも書いてある。何故日月は東から登って西に沈むのか、なぜ季節の変化はあるのか。小さな子供にとっての関心事は周りの自然である。それが全て興味の対象になっている。また目が見え、耳が音を聞き、心が物を思うわけなど、皆不思議でならない。そのわけを周りの大人に聞くが、大人はそこそこの答えはするが、梅園（幼名晋）少年は、納得いかない。なお聞くとうるさい奴だということになる。

### (イ) 自然に対し尽きせぬ疑問を抱く、梅園（幼名 晋）

何故重いものは沈むのか、何故軽いものは水の上に浮かぶのか、それを大人に聞く。多少の学のある大人は、重いものは「陰」で出来ているから沈む、軽いものは「陽」で出来ているから浮かぶのだと答える。そうすると、晋少年は「陰」とは何であるか、「陽」とは何であるか、とまた聞く。そうすると、大人はそれ以上答えられない。そして最後には、重いものは沈む筈、軽いものは浮かぶ筈、これは自然のことなりと言って、大人たちは皆そういう

答えて片付けてしまう。筈という便利な言葉がある。今でも我々は時々使う。大人たちは、全部“筈”で処理してしまう。何とか理解したい、解き明かしたいことがあるのに、大人がまともに答えてくれない、そういう体験をふんだんにした少年である。

## (2) 三浦梅園の信念

### ① 宮仕え（仕官）の要請を断る梅園青年

文字を覚えて本を読むようになって、また読むが納得がいかない。当然 20 代を過ぎると優秀な青年であることが分かってきて、近くの藩から宮仕えしろと指令が来る。それを梅園青年はみごとな台詞で断る。私には目の前を流れる清流、二子川、まわりをとりまく二子山、私にはこの二子川と二子山があれば満足である、特にそれ以上のものは望みません、と言ってやんわりとその要請を断わる。

### (ア) 梅園が「宮仕え」に恐怖を覚えた理由

梅園 56 歳の作に『養生訓』がある。その中にこういう指摘があった。中国の古人の言葉に「人の衣を<sup>ま</sup>衣る者は人の憂いを抱き、人の食を食む者は人の事に死す」とある。つまり就職して何処からか給料をもらう、すなわち杵築藩の藩主から給料をもらう、生きるための糧を主君からもらったからには、その主君に一大事があったときは、主君のために死ななければならない、自分の命を差し上げなければならない。そういうモラルの下で長い間教育され、梅園はそれをよく知っていた。人の世話になったときは、その人のために自分の命を捧げなければならない。これは梅園にとって大変恐ろしいことだった。宮仕えにより、自然研究を中断しなければならない事態に遭遇することがあり得る。自分の命が断たれることによって、自然研究が断ち切られてしまうことがあり得る。これに梅園は恐怖を覚えたのである。

### (イ) 「宮仕え」に恐怖を覚えた梅園の生き方

梅園は、「宮仕え」は一切断って好きな仕事、好きな研究に生涯邁進し、質素な生活をす。お父さんが立派で、旅の好きな風流な人だったようである。庄屋だったこともあるが、村で苦しんでいる人や、飢えている人がいると即座に助けに行った。お父さんの教えは、人助けするためにはお金が必要だ、だから質素儉約に努めろということであった。それを梅園もよく理解し、普段から質素に努めた。

### ② 梅園の人間観の基にある生活信条、「自立」

梅園は、「自立」を生活信条とする。絶対に経済的に人の世話にはならない、これを徹底し、集まってきた学生たち、弟子たちにもそれを教える。何か人に依存する、人に頼る。人がいいものを持っていると羨ましが。でもその人がそれを自分にくれなかった場合に、物欲しさに、それを何とか自分のものにしたくなる。そういう気持ちが始まったら盗みを働き、最後は殺人にまで至る。四莫の教えである。「莫賤於乞、莫辱於偷、莫慘於奪、莫虐於殺」

(乞より賤しきは莫し。僞より辱しきは莫し。・・・)。これが梅園の人間観である。人に迷惑をかけないという生き方を梅園自身が徹底する。それが宮仕えしないということに表れている。近代以後は身分制度が無くなり、就職することが一般的であるが、梅園は質素な生活に努め、研究時間とその生活を確保したのである。

### (3) 三浦梅園の生涯

#### ① 梅園の67年の生涯

それは、山中で、一途に、不思議な自然の現象の解明に捧げた生涯

湯川秀樹先生が梅園ファンであることは有名である。日本最初のノーベル賞受賞者として、敗戦直後の日本を大いに励ました湯川先生は、国民的英雄になったことから大変忙しくなられ、時間がなくなった。その湯川先生が梅園宅を訪れた。そこで湯川先生は、山中で過ごした梅園には溢れるように時間があつたことを、本当に羨ましがられた。梅園は、7、8歳の頃から不思議な自然の現象を何とか理解したいという思いを大切にし、宮仕えしないという決断を自らの意志で行い、一途にそれを実践した。梅園は小さな小さな自然哲学者から出発して67年の生涯を掛けて大きな自然哲学者になった人である。

#### ② 梅園の思索は、厳格な規則正しい生活の中で深められ、膨大な作品として結実

イマヌエル・カント (1724~1804年) と三浦梅園 (1723~1789年) は生まれた年が一つしか違わない。カントには有名なエピソードがある。カントはある所を散策するが、その時間がいつも決まっている。カントがやって来ると今何時か分かったという。そのぐらい規則正しい生活をした人のようである。恐らく梅園もそういう人だろう。

梅園は、朝早くから起きていた。名前が知られていくと、当然若い人たちが集まって来る。30代の後半くらいになると、自ずから「梅園塾」という塾を開かざるを得なくなる。塾生を教えなければならない、自然を観察しなければならない。書き始めた『玄語』を執筆する仕事もある。梅園はいつ学術的な仕事をしたのだろうか、いつ休んで睡眠時間は何時間だったのかと考える。お父さんが亡くなったのは彼が38歳の時である。お父さんに対する尊敬の念が凄かったらしく、お墓を自分の家の裏山の上に全て移し、毎日3度、朝、昼、夕と墓参りを続けたそうである。

梅園の生家を訪ねると、そこから墓まで片道20分くらいの登り道となっている。体を鍛える要素があつたと思える。また、その山道を上り下りするときに、いろいろなことを考えたように思える。年を取ってからは、さすがに3度は無理で、2度の墓参りにしたそうであるが、1日3度であれ2度であれ、1回欠かしたときは必ず何かで補った。そうした限られ



イマヌエル・カント  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

た時間、限られた 67 年の生涯の中で、膨大な作品を残した<sup>1</sup>。

### ③ 著作から見る梅園の関心の所在

梅園は、本に親しむことになる前から、自然の中での生活を通じ、自然現象が不思議で仕方のなかった子供であり、生涯を自然の探求に費やした人であった。梅園には自然哲学者との規定が一番ふさわしい。

しかし同時に、とても立派な漢詩概論『詩轍』を書いている。更に、『倂原』<sup>2</sup>がとても有名である。国際的にはこの『倂原』が一番知られている。それから、長崎旅行の紀行文である『帰山録』があり、『養生訓』もある。

## II 三浦梅園の業績

### (1) 経済論『倂原』を通じて世界に知られる梅園

『倂原』は、お金とは何かを説明した作品である。お金の本質は、流通手段であり、物を交換する道具であり、ただそれだけであることを明らかにした本である。しかし、長い人類史において、何時の頃からか、お金が富の蓄積の手段に転化する。人類は、お金とは富だ、豊かさの証しだと考えてしまう。それを梅園は間違いだと言う。お金は貯めるものではなく、流通手段として使わなくてはいけないということを、今から 250 年前に明らかにした。

お金の本質を世界で初めて明らかにしたのは、フランスのボアギュベール<sup>3</sup>である。ボアギュベールは、梅園より 50 年も早くそのことを明らかにした。だから国際的には彼である。しかし、ボアギュベールの著書は、当時東アジアに伝わっていない。梅園は独自の考察によってその本質を明らかにした。近年、ドイツ語で『倂原』の訳本が出た。英訳はあるが、本にはなっていない。ただし、ネットには載っている。『倂原』を通じて、経済論においても梅園は世界に知られている。

### (2) 百科全書派時代、東アジアに登場した「知の巨人」たち

三浦梅園(日本)、洪大容<sup>4</sup>(朝鮮)、王夫之<sup>5</sup>(中国)など

世界史的に万能選手として評価される学識者は、17、18 世紀、フランス革命の時代に活躍した百科全書派と言われる人物の中に多くいる。文字どおり、立派な百科全書を作成するなど、18 世紀に活躍した人物、ディドロがその代表選手である。ディドロは、梅園と同じ時代の人物で、とても魅力のある人であり、万能選手である。美術論も書き、演劇論も書き、

<sup>1</sup> 三浦梅園の作品の 9 割方は、『梅園全集』（弘道館 大正元年）に収録されている。

<sup>2</sup> 梅園が著した、江戸時代の商品経済における価格について説明した経世論。近代的な貨幣論

<sup>3</sup> ボアギュベール（1646 - 1714 年）は、フランスの経済学者

<sup>4</sup> 洪大容（1731～1783 年）は、朝鮮（李朝）の実学思想家・科学者

<sup>5</sup> 王夫之（1619～1692 年）は、明末から清初にかけての思想家・儒学者

様々なことをこなし哲人である。梅園もそういう人である。

17、18世紀は、百科全書派の時代として世界史的には捉えられている。東洋でも、朝鮮（李朝）、中国（明朝・清朝）に、西洋の百科全書派に通じる人物の輩出があった。朝鮮の天文学者で、宇宙が無限であることを認識した学者に洪大容がいる。梅園と同時代の人物である。中国では1644年に漢民族の明朝が滅びて満州族の清朝が誕生するが、その前後に活躍した人たちに何人かいる。王夫之もその一人である。満州族が天下を取ったとき、石船山の山中奥深く逃れて晩年の17年を貧困のうちに暮らした気骨ある思想家で、船山先生と呼ばれる魅力のある人物である。こうした知の巨人のような学者たちが17、18世紀の東アジアに多く登場する。

### （3）梅園研究に向かった経緯<sup>きえいひょうと</sup>。三枝博音先生との因縁、梅園研究(研究資料)の現況

私が、日本人は論理的でない、論理的な思考ができない、自分もそうだというコンプレックスを有していたころ、偶然に三枝博音著『日本の思想・文化』（第一書房1941年）の目次に、「日本の論理思想」の文言を発見し飛び付いた。その冒頭に、日本において23年かけて23回も書き直して哲学書を完成させた人がいる、それは三浦梅園である、と書かれていた。

ところで、三枝博音先生は、科学史の分野の先駆者の一人で、梅園研究に大きな足跡を残された方<sup>6</sup>である。この三枝博音先生の著書『日本の思想・文化』を手にしたのは、三枝博音先生のご不幸が切っ掛けであった。1963年11月9日、神奈川の鶴見駅で電車脱線転覆事故が発生し、161名の方が亡くなった。その中に、横浜市立大学学長三枝博音先生がおられた。翌朝の新聞に三枝博音学長死去の記事が出る。それを見て、三枝博音先生著書『日本の思想・文化』を慌てて開いた。その目次に「日本の論理思想」の文言を発見した。こうして三枝博音先生のご不幸が切っ掛けとなって、偶然にも梅園研究に向かった申し訳ない経緯が私にはある。

### （4）哲学の根本精神が説かれている「多賀墨郷君にこたふる書」

「多賀墨郷君にこたふる書」の手紙の中に、「うたがひあやしむべきは変にあらざして常の事也」という、これこそ哲学の精神といえる指摘がある。哲学の精神とは何か、学校の教科書では、デカルトの『方法序説』で哲学の精神が語られる。デカルトより後であるが、三浦梅園は、疑問を持つべき対象は何か変わったことではなくて、当たり前になっていること、当たり前と考えることをこそ疑え、と言っている。これこそ三枝博音先生が言われた通り哲学の精神である。こういう素晴らしい命題を打ち出してくれた先人が18世紀の日本にいた。これだけで私たちは救われる。

---

<sup>6</sup> 三枝博音編『三浦梅園集』（岩波文庫）は現在絶版になり、島田虔次・尾形純男共編『三浦梅園自然哲学論集』（岩波文庫）が出ている。そこには、最初に収められていた「多賀墨郷君にこたふる書」は、原文と口語訳が入っている。しかし『徂原』、『帰山録』は削除されている。梅園学会では『徂原』の口語訳を作り、文庫本として世に出す準備をしている。

## (5) 西洋に優るとも劣らない東アジアの哲人、

### 三浦梅園（日本）、洪大容（朝鮮）その先見性

論理コンプレックスとともに、東洋には西洋コンプレックスがある。素晴らしいものは全てヨーロッパで生まれた。古代ギリシャ文明、ルネッサンス、17世紀の科学革命、全てヨーロッパ由来であると。中国をはじめ東アジアで、批判的な精神、科学的な精神、論理的精神を発揮した先人たちは何処にいるのかと当然探す。そのとき三浦梅園に出会った。23年かけて23回も書き直して哲学書を完成させた人、三浦梅園の発見である。西洋コンプレックスは一部救われた。

同じ時代、18世紀の朝鮮（李朝）に、宇宙は無限であるということを知った天文学者、数学者がいた。洪大容である。地球は1日に1回転する。その速さは大砲の弾丸速度より早いと書いている。天の川は無数の星の集まりである。地球も太陽もその一角にある。その天の川の向こうに天の川のようなものがどれだけたくさんあるか分からないと漢文で書いている。18世紀の朝鮮に、宇宙の無限の認識をした天文学者がいたことを知り驚いた。

## III 三浦梅園の命題

### 命題1：人造則理先、天造則氣先

#### <「原子の世界」のヨーロッパ、「気の世界」の東アジア>

「人造則理先、天造則氣先」。強靱な論理的思考力の持ち主としての三浦梅園の代表的な命題である。「譬へば舟車を造るがごとし。舟に先だつて舟の理に照し、これを以てこれを造る。果して載<sup>ま</sup>泛<sup>はん</sup>の用を為す。車に先だつて車の理に照し、これを以てこれを造る、果して転持の用を為す」。舟を造るには舟の仕掛け、舟の理を理解していなければ舟は出来ない。下手をすると沈んでしまう。車を作る場合、車輪であるが、その理というものが分からないと出来ないと言っている。人間がものを造る場合には、そのものの仕組を正確に認識しないとそのものは出来ない。人間の力の最たるものである。ところが、天がものを造るときは気が先だ、気とは自然そのもの、存在そのものことである。天がものを造る場合は人間のようにこれを造ろうとして造るのではなく、自然が自然にしてものが出来ていく。すなわち、天がものを造る場合は気が先だ、人間がものを造るのには理が先だということである。こういう認識をしていた人が江戸時代にいることを知ると本当に救われる。

ヨーロッパでは、「原子（アトム）と空間」、「原子と空虚」、この2つの原理で世界は成り立っていると考える。空間がないと原子は動けない。「原子の世界」はこの2つの原理から出発し、したがって機械を持つ世界になる。「原子の世界」は、「原子と空間」、「原子と空虚」であり、最初から切断されている。物理学も化学の世界も、そうした原理で組み立てられている。

ところが東アジアは残念ながら「気の世界」である。「気」は目には見えないが、物質の最小単位だという意味では原子と同じである。この「気」が聚<sup>あつま</sup>って物が出来る、「気」が散じて物はなくなる。したがって「気の世界」には連続性がある。有機体の世界である。「気」が濃いか薄いかで区別するだけである。

これは老荘思想の「気」の世界である。「道」から生まれて「道」に還ると言う老子。荘子は全て「気」が集まってものができる、また散じて「気」に還ると言う荘子。老子の「道」を「気」に置き換えてもいい。東アジア哲学は、世界は一つの大きな「気」から出来ているという「気の哲学」である。

したがって、東アジアの世界で優秀な自然哲学者は皆、全ては「気」から出来ているとする「気」の哲学者である。漢代の王充<sup>おうじゅう</sup>も、宋代の張横渠<sup>ちやうおうきよ</sup>も、方以智<sup>ほういち</sup>も、王夫之（王船山）も、また三浦梅園も、洪大容も皆「気」の哲学者である。「理」が先だ、「気」が先だと、朱子学の論争があるが、「気」の哲学者にとっては、「気」が先である。「気」があって、「気」の法則として「理」があるという「気」と「理」の関係である。

命題2：<sup>いちそくいちいち</sup>一即一一、<sup>いちいちそくいち</sup>一一則一

<「一一」が「主」で、「陰陽」は「声（名）」のみ>

梅園の「陰陽」理解の独創性は、「陰陽」を、「一即一一、一一則一」と定式化したところにある。「気」というのは「一」である。「気」というのは全体を「一」と考える。姿は現さない。それが、正反対の力を持っている「陰」と「陽」に姿を現わす、だから「一一」となる。

「陰陽」の理論は、中国の古代からの東アジアにおいて支配的な理論である。梅園もその陰陽でものごとを考える。だが、梅園は、今までの陰陽論にはない緻密な考察を行い、「陰陽」を丸裸にして見せた。普通、陰陽の漢字表記では、「卩（こごと偏）」を付するが、彼は、途中から、この「卩（こごと偏）」を取る。旁（つくり）の方だけで、陰陽を表していく（会、易）。その「卩（こごと偏）」を取り去った会易という字は中国の古字にある。梅園の造字ではない。本稿では以下も陰陽と言う漢字を用いるが、梅園の文中では、上記の（ ）内の漢字である。問題は陰陽をどう捉えたかということである。「一則二」とか「一則三」とかいう捉え方は古代からある。「一則二」、「二則一」であれば全然変わらない。

何処に梅園の独創性があるのかというと、この「一一」という鋭い規定にある。「陰」と「陽」は「一一」だとする。男も女も「一一」であるが、その関係の中で、同一性、対立性、対等性の3つを梅園は指摘している。居を同じくし、道を異にし、力を同じくする「一一」という鋭い規定に注目していただきたい。

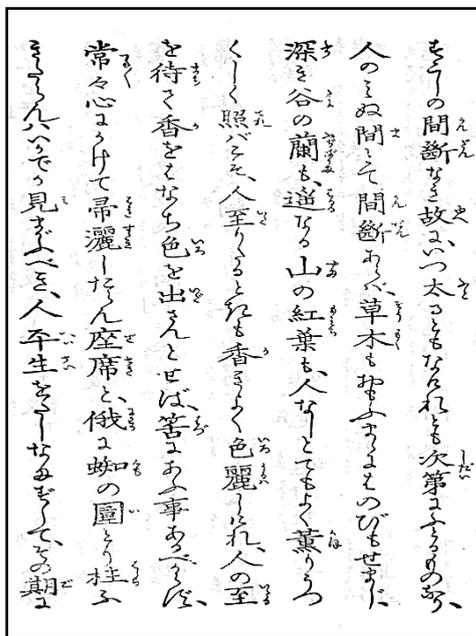
「一一」が「主」であって、「陰陽」は「声」。人間が付けた名前ではない。実名、実と名

という言い方が一般的にはあるが、梅園は「主」と「声」という漢字を使って説明する。「一一」は存在するが、「陰陽」はあくまでも「一一」の名でしかない。陰陽という漢字の概念に囚われていない。「一一」という鋭い規定に、梅園の独創性がある。これが現時点における梅園研究の到達点である。それは『玄語』に書かれている。

ただ、湯川秀樹先生が言われる「数式では表せない世界」、それは「連続性」そのものの世界であり、確かにそういう世界である。しかし、そこをどのように解き明かすのかの課題が依然としてある。梅園生誕 300 年を迎える時に、「解き明かすことができました、梅園哲学は難しくありません」と言えるようにしたいものである。

### 命題 3：誠者天之道也、誠之者人之道也（『中庸』）

< 「誠」。間断がないこと。絶えず連続していること >



「誠といふの説」の冒頭  
『梅園学会報』18号より

強靱な思考力の持ち主である梅園には、「誠といふの説」という和文の随筆がある。「誠者天之道也、誠之者人之道也」（誠は天の道なり、これを誠にするは人の道なり）という命題が『中庸』<sup>7</sup>の中に出てくる。

戦前の軍国主義的立場の右翼が、日の丸の真ん中に「誠」の字を入れた鉢巻きをし、幕末の維新のときにも志士たちによって「誠」の字が盛んに活用された。江戸時代の思想の核心は「誠」の思想であるとの指摘もあって、「誠」は、非常に感情的で主観的な概念として映っていた向きがある。何故「誠」なのだ。こんな風だから東アジアは、ヨーロッパに負けたのだとの思いが、私には強くあった。

しかし、梅園の随筆「誠といふの説」と出会い、

これを読むことによって、『中庸』の命題の、上記のような解釈は間違いであると分かった。「誠」と「信」の字を梅園は比較する。人（にん偏）の信用の「信」は嘘を付かないという意味であるのに対し、言（ごん偏）に成るの「誠」は偽りがないという意味だと言う。言（ごん偏）の「誠」は人（にん偏）の「信」よりはるかに大きいと梅園は言っている。自然は偽りをしない。偽りをするのは人間である。何故人間が偽りをするかという、人間は意識を持っているからである。自然には意識がない、人間には意識がある。これは当たり前のことであるが、梅園はそれをしっかりと天と人を区別して論じる。天は自然そのもので、これは

<sup>7</sup> 『中庸』は、『大学』『中庸』『論語』『孟子』という四つの書の一つとして選ばれ、11世紀から朱子学の中で、あるいは科挙の試験のテキストとして、『四書集注』の形で東アジア哲学の世界でよく読まれた。

「無意」意がない、意識がない。人は「有意」意がある、意識がある。そこが天と人の大きな違いだと言っている。

人間の能動性、有意性から全てが展開できる。物事には理がある、それを発見し<sup>つか</sup>掴み、活用しているのが人間である。人間の偉大さもこの意識があることにある。しかし、また人間の至らなさも、だらしなさも、醜さもこの意識があるところに発する。21世紀の人間の教師は植物だと私は思っている。草花、樹木は完全である。どんな条件の下でもすくすくと育っている。間断がない。植物には偽りが無い。それを梅園は「誠といふの説」の中で言っている。

幽谷深山の花、山の中で独り咲いている百合の花があるとする。人が見ていようが、いまいが、絶えず良い香を出し、美しい姿を見せてくれる。ところが人間には間断がある。人が来るなと思って慌てて掃除をする。その「にわか掃除」はすぐ分かる。普段から人が来ようが来まいが、きれいにしておくことが大事だと梅園は書いている。それが実は『中庸』の中に書かれている「誠」という概念である。その「誠」の特徴は間断がないということである。絶えず連続している、そういう営みを、『中庸』では「誠」という概念で捉えている。

梅園の随筆「誠といふの説」は、明治37、38年頃から日本の中学校の教科書に採用され始めた。全文これを載せたのは昭和10年、岩波書店が発行した『国語』という教科書である。戦前の人、昔の中学の国語の教科書で「誠といふの説」に触れている。ところが、敗戦後、この「誠といふの説」が、国語の教科書から消えた。これこそ中学生から、あるいは高校生からでもいいのであるが、日常的に読むべきものと思う。

#### 命題4：人道を以て人と為る。天道に<sup>したが</sup>順って人と成る

##### <「人間の活動」と「自然の営為」との調和>

人間は、人道を以て人と為るという側面と、天道に順って人と成るという側面の統一から成っていることを梅園は指摘している。「人道を以て人と為る」の意味はよく分かる。言葉を覚え、道具で物を作り、勉強し、教育を受ける、あるいは物を生産する。これが「人道を以て人と為る」という側面で、人間はそういうものだというのを、みんな分かっている。しかし、もう一つの側面「天道に順って人と成る」という側面からも人間は成り立っていると言う。真、誠、実と言う要素はこの側面であるというのである。10年前に出会ったときは、天道に順って人と成る、ということが何なのか分からなかった。「天道に順って人と成る」ということは一体何だ、ということが現代人には分からなくなっている。その後、私はこの側面は人体の内部の臓腑の働きがその確かな例であることに気づいた。「誠といふの説」の中で梅園はこの例を指摘している。それらをも参考にし、この側面はどういう所にあるか、意識的に考えていこう。それが地球の生態系を守る一つの実践である。

命題5：俗習の蔽は学<sup>これ</sup>之<sup>べんしん</sup>が砭鍼<sup>なげう</sup>を為す。学習の蔽は殆ど薬石を擲つ

<俗習の弊害は学問が治すが、学習の弊害は治せない>

梅園の哲学的精神に関連する言葉に「俗習の蔽は学<sup>これ</sup>之<sup>べんしん</sup>が砭鍼<sup>なげう</sup>を為す」がある。「俗習の蔽」とは、人は、普段の生活の中で、話したり聞いたりしているうちにいろいろなことを教わるが、この出来上がった認識が俗習である。俗論は弊害が多い。一面しか見ていないとか、視野が狭いとか、勘定高いとか、憎しみが籠っているとか、そういう認識がいっぱいある。その弊害は学問が治すという。学ぶことによってその弊害を治す。砭鍼とは治すという意味である。学問が「俗習の蔽」を治す。だからやはり勉強しなさい、本を読みなさい、ということである。

ところが、「学習の蔽」は、大学まで行く、大学院まで行く、研究所でまた学習する。そこで得た認識は連続する、いろんな知識が身に付く。それが真理<sup>つか</sup>を掴んでいる場合はいいが、いわゆる学問的な派閥があり、歪んだ認識になっているとその学習によって出来上がった歪んだ認識は「殆ど薬石を擲つ」、もうそれは治療のしようがないと梅園は言う。だから高等教育を受けて威張ってそれをあちこちでひけらかしている人がいるとすると、そういう人はどうしようもない。得意になって何か言っていることに対し、本当に真実を見ている人は、それを治そうとすると喧嘩になったり、憎まれたりする。これを「学習の蔽は殆ど薬石を擲つ」と言う。その根拠として、「之を染めるに易く」、これを染めることは簡単だ、「之を素<sup>もと</sup>にするや難し」、一度色を付けてしまったら元に戻すのは難しい。そして「之を復するや難し」と言う。

命題6：蔽は必ず明<sup>めい</sup>に由る。塞<sup>そく</sup>は必ず通<sup>つう</sup>に由る

<閉塞は開通から生まれる>

「蔽は必ず明<sup>めい</sup>に由る。塞<sup>そく</sup>は必ず通<sup>つう</sup>に由る」。「蔽」は間違った認識のことである。覆われてしまって、ものが見えないということが蔽である。それは何処から来るかという「明」から来る。「明」は理解していることである。「塞」はふさがっていることである。ふさがっているのは通じているところから「塞」が生まれると言っている。

これは、頭の悪さは頭が良いということが根拠だという。「蔽は必ず明<sup>めい</sup>に由る」、分からないということは分かったということが根拠になって分からないということが生まれる。それから塞がっているというのは、そこを開通したからまた塞がるということである。逆を言っているわけである。

この認識論からすれば、染めることは易しい、しかし元に戻すことは難しい。学習によって出来上がってしまった認識は元に戻すのは至難の業だと言う。勉強するということは実は恐ろしいことだと言っている。これについて驚かない人は余ほど鈍感な人である。梅園からこう言われて、思い当たる人、すごいことを梅園は言っていると、心に受け止める人は、梅園によって進む人、梅園と出会って良かったと思う人、梅園が喜んでくれる人だと言う。

#### IV 次代の人間像を探る。『<sup>ゆえんろく</sup>愉婉録』に読む「天人の合」

「天人の合」とは何か。梅園は、「天人の合」を達成したら、その人は永遠の師となると言っている。どんな平凡な人でも、「天人の合」という意識に達したら、その人は人類の教師に成る、百世の師（永遠の師）と成る、と言っている。「天人の合」を達成した人とは、どういうことか。「天」は無意である、意識がない。「人」は意識がある、有意である。意識があるということは、プラスにも働けばマイナスにもなる。そうすると、「天人の合」という場合には人間の意識を無くして無為なる天に帰した状態である。

それを『愉婉録』に書いている。「愉婉」は中国の古典に出てくる言葉である。中国の古人は、親孝行の息子や娘のことを「愉婉」と名付けた。親孝行の息子や娘は、親に対して非常に穏やかで、親が心配するような怒った顔や悲しい顔をしない。親の前ではいつもにこにこして、親に何の心配もかけない、そういう人の姿を「愉婉」と名付けている。中国の古典『禮記』の中にある言葉である。それを梅園が引っ張って『愉婉録』とした。

『愉婉録』に書かれているのは、当時の国東半島に実際にいた親孝行の息子や娘の記録である。梅園が本当に脱帽している。涙を流してその現場を見たというケースもある。息子は、ものが言えない。娘がいるが、娘は耳が聞こえない。その兄妹が一つの部屋で生活している。もちろん親の介護もしていた。その現場を見て、梅園がはらはらと涙を流す。老人介護のこれ以上ないような見事な話がいくつも記録されている。

それは、親孝行の息子や娘の話だとばかり思っていたが、「天道に順がって人と成る」という人間のもう一つの側面についての話であり、同時にそれが、「天人の合」に関する話であると気付いた。ものすごく親孝行している人のケース、その人が努力している場合もあれば努力していない場合もあると思うが、その努力しないで見事に親孝行を成し遂げているケースを梅園が見た時に、脱帽して、この人たちのことは記録しなくてはならない、後世に伝えなければならぬと思って、書物にして後世に残したわけである。それを讀んだ人はまた感銘を受け、そうすることにより百世の先生に成るわけである。「天人の合」を達成した人間は、無名であるか、有名であるかは別として、そうした人は庶民の中に多くいた。

『玄語』の研究にも劣らず、これから 21 世紀を生きていく上では、梅園が後世に残してくれた『愉婉録』の中の「天人の合」の実践が尊いとする認識が、より強まる時代になっていくであろうと思う。

おわりに

##### (1) 人間賛歌。だが、「人間（人）」は、「自然（道）」に如かず

梅園は今から 250 年も前の人であるが、人間は如何に素晴らしいものかを明らかにしてくれた。そしてヨーロッパコンプレックスから救ってくれた。論理的コンプレックスからも救ってくれた人物である。梅園は、人間の能動性、偉大性を実行し、実際に見せてくれた人

である。しかし同時に自然の方が人間よりはるかに偉大である、「道」は「人」よりも尊いということを指摘している。

## (2) 先進国は地球温暖化防止に向けてライフスタイルの変更を

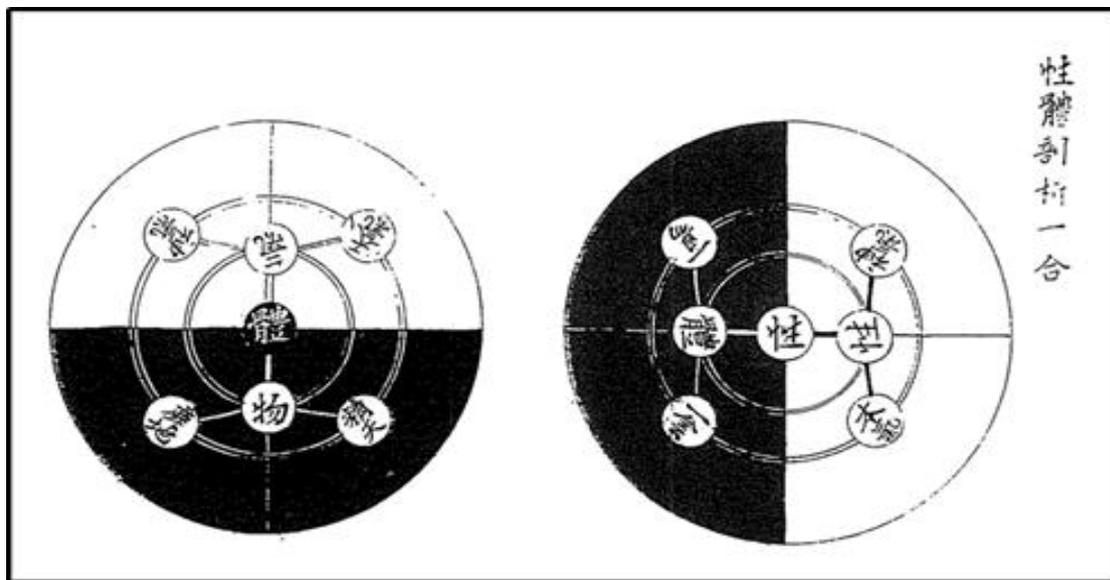
最近のメガクライシス、地球の温暖化が進んで、異常気象が発生している。雷が多発して巨大な雷が降ってくるような時代になった。このような事態・時代になって初めて、自然には勝てないことを、我々は日常的に体験する。我々の生活様式が地球温暖化を促進している側面がある。このままでは21世紀中に平均温度が4度も上がるという。何とか地球の温暖化を防がなければならない。我々のライフスタイルをどうするか。特に先進国の人間に責任がある。発展途上国の人たちは、CO<sub>2</sub>の排出基準を先進国と同じにしろと要求するのは不当だ、先進国だけいい生活をしていると言っている。ともかく先進国の人間が率先してこの地球温暖化の防止に向けて行動しなければならないと思う。

## (3) 日々の生活の中でこそ、梅園の教えを実践することが肝要

「うたがひあやしむべきは変にあらずして常の事也」。ここに言う「常の事」とは、地球温暖化を招いている我々の日常生活のことでもある。地球の生態系を守らないことには地球の未来はない。こういう事態・時代の中でこそ、梅園が指摘している「天道に順って人と成る」という側面を、よく考えて再発見し、それを実践していくことが求められる。我々が梅園から学ばなければならないことは、以上に記したように一杯あるが、突き詰めると、学ぶべき最も大きなことはそこなのではないかと思う。

## 補遺

### 『玄語図』



『近世儒家資料集成 第1巻 三浦梅園資料集 上』ペリカン社 1989年(297~298頁)

#### 《説明》

『玄語』は、陰陽哲学、気の哲学をベースに存在の世界を条理語で構築したものである。その表現にはおよそ175の図と10余万語からなる文(漢文体)が用いられ、ともに細部に至るまでシンメトリック(対称的)な構成に貫かれている。

上図は、性体気物の世界の図(玄語図)である。図の名の「性體(体)剖析一合」の意味は、一(全)は性と体ぼうせきに剖析し(分かれ)、同時に性体は一に合しているという意味である。

右の図の性は、自らを性と体に剖析し、同時に合して性となっている。剖析した性は神気と本気に剖析し、同時に両者に一合して性となり、体は一合一易に剖析し、同時に体に一合している。左図の体は気と物に剖析し、気は神気と天氣に剖析し、物は精天と麤(粗)地に剖析し、剖析した両者は同時に一合していることを示す。

ここにいう剖析とはきんりつ祭立とも称され、一合は混成とも称される。梅園の条理法則は「一即一一、一一則一」と規定されるが、前者が剖析(祭立)、後者が一合(混成)を示す。両者の間に時間は介在しない。同時成立である。梅園はあらゆる存在は、性体気物という素具(構成要素)から出来ていると考えた。

この図は、175ある玄語図の最初の方の図であるが、各図には物質と運動(活動)、空間と時間の要素がみな含まれている。『玄語』は、玄語図と条理語で組み立てられ、構成されている。「一即一一、一一則一」で構成されている世界である。

## 質疑応答

### Q 湯川秀樹が好んだ梅園の言葉、「反合成全」とは、如何なる意味か。

梅園生誕 300 周年というお話があったが、湯川秀樹が 1970 年の 3 月の定年の直前に、梅園のお宅、大分の旧居を奥さんと一緒に訪れている。

湯川秀樹の生誕 100 周年が 2007 年で、その時に、湯川秀樹の文化的な活動を展示するものとして梅園に関係するものがないのではないかと考えていたところ、湯川秀樹が三浦梅園の旧居を奥さんと訪れたときに「反合成全」と揮毫し、それが掛け軸になっているということを知った。そこで、それをお借りして展覧会に出展できないかと手を尽くしていたとき、その話が小川先生のところに行き、写真をいただいた経緯があった。

湯川秀樹は晩年、定年後、文化的なことにずいぶん意欲を持っていて、三浦梅園も深く研究しようと思っていた。というのは、旧居を訪れた後、『玄語』に沢山の「玄語図」が入っていることを知り、その本を、古本屋で買っている。それから 1～2 年で病気になってしまって結局手付かずとなり、残念だった。

そうした経緯もあり、湯川秀樹が揮毫した文言、「反合成全」の解説をお聞きしたい。

#### (小川)

湯川先生が揮毫された「反合成全」の言葉は、『玄語』の冒頭「本宗」の陰陽の最後に出てくる言葉であることが確認できた。

「反合成全」という言葉の意味であるが、反するというのは陰陽の関係である。陰と陽の関係を反というものとして捉えていて、「一即一一」、「一」というものが「一一」として姿を現わしている。繁立まきりつという言葉で表現するが、鮮やかに立ち上がるという意味である。「一一」というのは、陰と陽の姿を現している。

ただ、そこには時間の経過がない。「一」が「一一」である。また「一一」が同時に「一」であるとしている。「一」と「一一」の間には時間はいれない。「一」が「一一」となる時に普通は時間がクロスすると。老子の「道」の場合は時間がクロスすることがある。混成した状態から、「道」なるものが陰陽なら陰陽という形で現れてくる、天地という形で現れてくる。そういう形で老子の場合はそこに時間の経過を考えているようである。しかし、梅園は「一」という全て、宇宙全体を表す「一」、一元の気、一元気と言っているのであるが、一つの気である。それが「一一」という形で姿を現わし、また同時に「一」に合していると考えられる。

すなわち「一一」として姿を現していることが「反」という形で姿を現わし、その「一一」は即座にまた「一」に「合」していると考えられる。「反」と「合」というのは「一」と「一一」の関係の運動である。そしてそれが全体を成立させている。「反合」が全である。全体を成している。「反合成全」は、そういう意味だと思う。

## 自然から学ぶことが人間の品性を最も高める

若い君たちへのメッセージは、日本に住む全ての人々へのメッセージでもある。それは18世紀の日本が生んだ三浦梅園と言う哲学者を知ってほしいというものでもあるからである。

三浦梅園は小さい頃から、見るもの聞くものすべてが不思議でならず、自然現象はもとより、手はどのようにしてこのように動くのか、目はどうして物を見ることができるのか、はては心はどうして物を思うことができるのか、その仕組みを知りたくてしかたのない少年であった。

山の中に生れたが、その名は次第に広まり、20代の中頃仕官の誘いを受けた。一人息子であったためという理由が大きかったのであるが、山の中での自然の考察と研究を中断されたくなかったので、それを断った。質素な生活と節約に努めて、67年の生涯で彼が明らかにした学問と思想で注目すべきことは、テキスト本文に述べた通りである。

今回の講義のサブタイトルに「日本と世界を救う自然哲学」と付けたが、その意味は次の通りである。日本人は世界のすぐれた文化を理解し吸収することに長けていると言われる。三浦梅園が当たり前とされていたことに関心を示し、納得いくまで考えた懐疑精神、批判精神、哲学精神を持ち、自分でそれを実践した人物であったことは、ともすればそのような態度や精神の弱い日本人を励ましてくれ、西洋コンプレックスから日本人を救ってくれる。

梅園は人間の能動性を確認しつつ、しかし、人間は自然の力にはかなわないこと、自然の前で謙虚になり、自然から学ぶことが人間の品性を最も高めることを教えてくれたことで、ともすると傲慢に陥りやすい日本を救い、地球の生態系を守る生き方を示してくれたことによって世界を救う哲学を明らかにしてくれた。このことに自信と誇りを持ちたいと思う。

2017年6月1日制作

編集・制作 公益財団法人国際高等研究所  
I I A S 塾「ジュニアセミナー」開催委員会

監 修 池内 了 猪木武徳 佐伯啓思 高橋義人

ISSN 2759-0585



満月に照らされて浮かぶ「ゲート」の胸像  
(国際高等研究所庭園)